マリンバ・打楽器奏者 宮本 妃子さん

450号記念インタビュー

音楽の楽しさ伝えていく

滋賀を拠点に各地で演奏会

みやもと・やすこ　マリンバ・打楽器奏者。守山市在住。石山高校音楽科出身で同志社女子大学音楽学科卒。94年、ドイツ国立フライブルク音楽大学大学院へ留学。卒業後、同大ソリスト科へ進み、99年に首席最優秀で卒業、ドイツ国家演奏家資格を取得した。国際的コンクールで受賞を重ね、現代音楽アンサンブル、ソリストとして活躍。石山高校音楽科、相愛大学（大阪）非常勤講師。

11月8日に演奏

11月8日午後2時、大津市打出浜のびわ湖ホールである「平和堂財団創立20周年記念スペシャル・ガラ・コンサート」で演奏する。無料（整理券要）。申し込みは、はがきに希望人数（1枚につき2人まで）、住所、氏名、電話番号、希望枚数を明記して、〒520―3047栗東市手原8―1―2ブラームスホール協会「平和堂財団スペシャル・ガラ・コンサート係」へ。10月10日必着。問い合わせは、平和堂財団（0749・23・4575）へ。

――打楽器を始めたきっかけは。

木琴が好きな母の影響で6歳から始めました。小さい頃は背が届かなくてビールケースに乗って叩いていたんです。高校まではマリンバ専門だったのですが、大学で大津市在住の演奏家、中谷満さんに指導を受けて、打楽器全般を演奏するようになりました。

大学を卒業するときに「もっと勉強したい」という強い思いがあってドイツへの留学を決めました。最初の1年は言葉も分からなくて友達も出来ず、つらくて家に引きこもる毎日でした。それでも2年間は頑張ると自分に言い聞かせて、1日8時間は練習していましたね。幸い、ソリスト科を卒業してドイツ国家演奏家資格を取得出来たこともあり、そのまま滞在。州立音楽学校で教えたり、現代音楽アンサンブルに参加したりして、5年間音楽活動を続けました。

――ドイツの生活で学んだことはありますか。

打楽器が活躍する現代音楽が、ドイツではとても盛んなんです。そこでアンサンブルに参加して経験が積めたことが大きいですね。また、音楽全体が盛んな国ですから、うわさで私の評判が流れてベルリンやブレーメンといった離れた地域から声がかかることもありました。でも男性と勘違いされることも多く、指揮者や周りの演奏家に嫌な顔をされることもありました。常に完璧以上のものを用意していかないと認めてもらえない。振り返るとつらいことも多かったですが、演奏家として学んだことも多かったと思います。

――帰国後の活動は。

05年に帰国。中学時代から暮らしている滋賀に拠点を置いて日本各地で演奏会を開いています。また、子どもたちに打楽器の楽しさを伝える活動も続けています。学校を訪問してワークショップを開催し、スプーンや台所用品などの身近なものを叩いたり、子どもたちに詞を書いてもらって曲とコラボレーションしたりして一緒に音楽を楽しんでいます。

打楽器は誰でもすぐに演奏できる身近さがあります。また、その種類の多さも魅力ですね。トライアングルやカスタネットといった楽器からあまり見る機会のない民俗楽器まで、まだまだ未知の世界が広がっていると思うと胸が弾むんです。

――最後に滋賀への思いと今後の抱負をお聞かせください。

滋賀はほっと落ち着ける場所。やはり琵琶湖が見える風景が好きですね。疲れた時には湖岸に車を止めて息抜きをしています。滋賀の環境が音楽家としての自分を育ててくれたと思っています。

技術面でも表現面でも自分を高めていくと同時に、打楽器を通して色々な人に音楽の楽しさを伝えていきたいですね。海外で言葉が通じなくても心で通じ合える体験をしてきました。自分もそんな体験を提供できる音楽家でありたいと思っています。

㊧「打楽器の魅力を発信していきたい」と話す宮本妃子さん＝守山市で
㊨02年、モンゴル国際現代音楽祭に日本代表として参加。草原でアンサンブルを披露した＝宮本さん提供